

生命を基本にする社会

中村桂子

※本稿は、2014年9月30日に、大阪市・梅田スカイビルで行われた講演の内容をまとめたものです。
〔 〕内は編集部注です。

皆さま、こんばんは。お忙しい中、おいでいただいて、ありがとうございます。

きょうは東洋哲学研究所の講演会ですが、実は私は東洋哲学という難しいことはよくわかりません。毎日つきあっている相手は、主に蝶とかクモとかイモリとかでして（笑）、そちらのほうが人間よりもつきあいや

すい（笑）。そのようなわけで、人間の役に立つことをあまりやっておりませんので、皆さまのお役に立つお話ができるかどうかわかりませんが、お時間をいただきましたので、よろしく願います。

「地球文明への道」というのが連続講演会の統一テーマであり、いま「東洋哲学研究所の」川田所長が「地球的問題群」の例を、くわしく挙げられました。うかがっているうちに、だんだん憂鬱になってくるような問題ばかりで（笑）。それらを乗り越えて、本当に皆が豊



生き生きと「生きる力」と、人間を圧迫する「権力」とは正反対の方向を向いています
——講演する中村桂子館長

かに幸せに生きられるような地球にしたいというお気持ち、私も共有いたします。

では具体的にどうするのかというと、これは難しいです。ただ「一番大事なものは何？」と聞かれたら、お金も必要ですし、いろいろ大事なものであるでしょうけれど、結局、「生きている」ということだろうと思っています。そんな話を聴いてください。

「人間は生きものだ」を忘れていないか

「文明」ということを私なりに考えて書いた本に、いまご紹介いただいた『科学者が人間であること』（岩波新書／2013年8月刊）があります。本を書くことは大変なのですが、これは、東日本大震災の後、「どうしても書かなくてはられない」と思って書いた、私にとっては珍しい本です。そのくらい考えさせられました。

大きな地震と津波があり、たくさんの方が亡くなりましたし、いまだに避難所暮らしの方がいらっしゃる。人間は力を持っていると思うけれども、やっぱり自然の力はすさまじいと思います。ここで、「私たち

はちゃんと自然と向き合っていたらどうか」という問いが生まれます。大きなビルを建てたり、夜も明るくしたりして、「私たちに、すごいことができている」と思っていますが、あの地震と津波のすごさ、あれに向き合って、私たちは何もできないという衝撃を受けました。毎日の生活の中で、自然についてちゃんと考えていただろうかと、しばらくは本当に何もできないくらい考えました。私にとっての最大のショックは、そこに原子力発電所があったことです。私たちの生活を支えるためには、それだけの大きな発電所が必要だと皆が考えて、そこに造った。それで、豊かな生活を支えていると思っていた。

けれども、もし発電所で事故が起きなければ、もっと早くに復興ができていました。まだ放射能汚染がひどく、自宅に帰れない。津波と地震だけだったら帰れたはずなのに、帰れなくなってしまうている。だれもが科学技術の恩恵をこうむっています。コンピュータもそうですし、暮らしを支えています。そこで、私たちはすごいことをやっていると思っていたのですが、

逆に科学技術施設があったがゆえに、災害をとてつもなく大きくしてしまいました。本当にこういう科学技術でいいのだろうか……科学の世界にいる人間として、落ち込みました。

地震が起きたのは東北という地域でした。私は先週も岩手の八幡平に行ってきました。末盛千枝子さんという絵本を作っていたらお友達がいて、その方を訪ねて行きました。岩手山が真正面に見えるお宅で、下を見ると田んぼが今ちょうど黄金色です。本当に美しい、素晴らしい地域です。ただ、科学技術文明の中で都会生活をしている私たちは、なんとなく東北という地域は「遅れている」と思っていたように感じます。

けれども、覚えていらっしゃるでしょうか。もう3年前になりますが、あのとき、科学者や技術者や政治家や経済学者はオロオロしていました。「こんなことは想定外です」と言い、「起こるはずはなかった」と言って、情けない状態でした。反対に東北地方の漁師や農民の方が語る言葉は素晴らしかったのです。

驚いたのは、ある農民の方が、放射能で汚染されて

田んぼでお米が作れないことがわかつているのに、水を張ったのです。地震は3月でしたから、5月には田植えをするので、その時季に水を張った。「お米が作れないことがわかつているのに、何で水を張ったのですか」と聞かれ、「だって、今年もツバメが来るだろう。ツバメが来て、この泥を使って巣を作ってきた。今年だってツバメが来るだろう」と言われました。すごいと思います。

漁師の方の言葉は「海はこわい。でも、おれたちはこれで生きているんだ。海というのは、ありがたいもんだよ。また海へ出たい」でした。その方たちの話は、社会のリーダーと言われる人たちの話より素晴らしい。「近代文明って何だろう？ 東京や大阪などの都会の生活は一体、何なのだろう？ 農業や漁業をやって、自然の中できちんと暮らしている人のほうが、すごい」とつくづく思いました。何となく大阪・東京のほうが進んでいる、東北は遅れていると思って暮らしていたけれども、違うのではないか。近代文明というのは人間

を育てたのだろうか、と思いました。

基本は自然です。そこに科学技術、近代文明が生まれたのは、つい最近です。これからは地球文明を築かなければならず、そのためには、私たちが暮らしているこの近代文明を考えてみなければなりません。ただ大きな発電所を造って「豊かだ」と言っているはいけません。自然と向き合わなければいけない。農業や漁業に携わっている人のほうが、よほど優れているではないか。現代文明は行き詰まっている、「これは変わらなければいけない」と思ったのです。

文明を変えらるゝといっても、革命を起こしたり、戦争を起こすわけではありません。いまを大事にしながら、しかも新しくしていくにはどうしたらいいか。そのための方法を考えなければいけない、と悩みました。私たちは目の前の華やかさに目を奪われて、本質を問うていなかったのではないか。「情報をたくさんもらって楽しいね、すごいね」というだけではなくて、心の中から湧き起こってくる内発的なものがなければいけない。「私は本当にちゃんと生きているだろうか」と、内側

から考えなければいけないのではないかと思います。

「地球文明」というテーマは、おそらく「いまは地球全体を考えなければいけない時代であり、自分たちの国や民族のことだけを考えていてはいけない」と、おっしゃっているのだと思います。失礼ながら、東日本大震災後に、政治家や立派な大学の先生方たちが魅力的でなかったというか、何か違うと感じたのは、「権力を失うのがこわい」と思っているんじゃないのです。そのようなものから自由になれたらいいのではないか。「地球文明」という題を与えられたときに、私はそう考えました。

そうは言っても、それをきちんと哲学的に説明できれば、いばってお話するのですが、そこが私の限界で、私が考えられることは、どんなに立派な建物を建てていても、「人間は生きものである」という事実が変わりはないということです。縄文時代に山の中を駆けめぐっていたときの人間と同じ「生きもの」である。それが本当に一番大事なことです。つまり、「自分は自然の一部だ」ということです。そのことは、先ほど申しま

したように、農家の方は、よくわかっていらっしゃる。おそらく縄文時代の人のほうが、もつとよくわかっていたことです。「こんな当たり前のことを、改めて言うな」と言われるようなことだと思います。皆さまも、そう思っているかもしれません。

私はただ、半世紀以上にわたって、「生きているってどういうことだろう?」「生きものって何だろう?」「生きものって不思議だな」と思いながら科学をやってきましたので、そこからわかってきたことを活かして、21世紀に考える「人間は生きものだ」という話をしたいと思います。

祖先はひとつ

——「ものみなひとつの細胞から」

私が「生命誌研究館」を高槻で始めてからちょうど20年になります（大阪府高槻市。1993年に開館）。私は東京の人間で、毎週こちらに通って来ていますが、高槻で20年過ごしました。20年前に「生命誌」を始めましたのは、人間は生きものであり、生きていることが

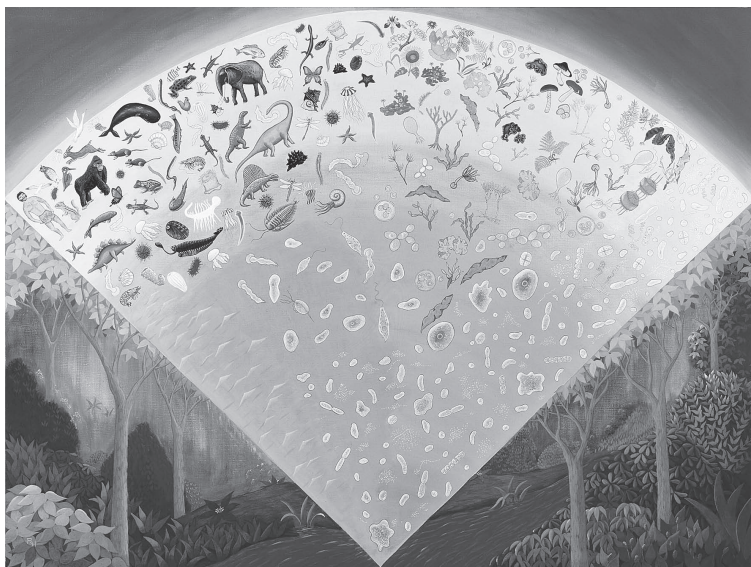


図1 「生命誌絵巻」 協力：団まりな／画：橋本律子

一番不思議だし、それを考えていくことで、生き方を決めていこうと思つてのことです。

「生命誌」とはどういうことなのかを描いたのが、この絵です（図1）。「生命誌絵巻」と呼んでいます。扇の形をしており、その天の部分にいろいろな生きものたちが描いてあります。バクテリアがいますし、キノコもあります。ひまわりが咲き、イモリもゴリラもいます。ここに描いてあるのは、地球上の生きものです。「地球文明」とおっしゃるときの地球ですが、地球は人間だけのものではなく、本当に様々な生きものがここで生きています。

全部は描けないので、こんなものを描いてみたいと思うものを描いてあります。地球には数千万種、人間が名前をつけているだけでも170万種類の生きものたちが暮らしています。その生きものたちがこの地球をつくっているのです。いまのこの「美しい地球」は、こうした生きものたちがいなければ成り立っていないのです。この地球をつくってくれている生きものたちがいる、しかも多様な生きものがいるということが大

事です。何か特別の生きものだけ、たとえば人間だけがいるということは考えられません。人間はすごいから人間だけいればいいということではなく、様々な生きものがいなければ地球は成り立ちません。それが、「生命誌」から第一に言いたいことです。地球には実に多様な生きものがいて、それぞれが皆大事だということです。

2番目は、こうした多様な生きものも祖先はひとつだということです。ご存じのように、すべての生きものが細胞でできています。脳細胞、心臓の細胞、そうしたすべての細胞の中には、必ずDNAが入っています。バクテリアもそうですし、人間もそうです。ヒマワリもそうです。そんなことが偶然起きたとは考えにくいし、私たちは「進化」という現象を知っていますので、「地球上にいる生きものの祖先はひとつ」「ひとつの祖先細胞からあらゆる生きものが生まれた」と考えています。それが扇の要の部分で、地球上の生命の始まりです。「ものみなひとつの細胞から」です。

では、「最初にいたのはどんな細胞で、いつどこで生

まれたのか」と言われると、残念ながらまだわかっておらず、研究中です。ただ、38億年前の地球の海の中にそういう細胞があったと考えていいので、この扇の要は一応、「38億年前の海」とします。ここにいたものが、38億年かけて、だんだん変化をして、キノコになったり、イモリになったり、私たち人間になったりしました。地球上の生きものは皆、祖先を共有する仲間なのです。

すべて「38億年を背負ったいのち」

大事なことの3番目です。普通、生きものについて考えるときは、バクテリアを下のように描き、だんだん立派になり、一番立派なのは人間だ、だから一番上に描こう、そういう描き方をします。この絵巻は、そういう描き方をしていません。扇の要から天までの距離はすべて同じです。つまり、天に描かれている様々な生きものは、すべて38億年という時間があって存在しているということです。「生命誌」は、この連綿と続く生命の歴史、その物語を読み解こうということです。

バクテリアが描いてあります。いま皆さんのお腹の中にもバクテリアがいます。大腸菌など嫌だとおっしゃっても、皆さんの大腸の中には必ずいる。その他、ビフィズス菌（いわゆる善玉菌として腸内を整える）など、いろいろな菌がいます。これがないと、生きていけない。無菌にしたら、私たちは生きていけません。そのバクテリアには、その前のバクテリアがいて、さらに前がいて、前がいて、いまここに存在しているわけです。バクテリアも、ここにいるためには38億年かかっています。ここにアリが這ってきたら、そのアリにも親がいて、そのまた親がいて、と38億年かかってここにいるのです。機械であれば、部品を1週間で組み立ててお店に出せます。でも、アリは組み立てられません。親がいなければ生まれない。その親にはそのまた親がいるわけで、どんな生きものも38億年の歴史を背負っています。小さなアリの中にも38億年という時間がある。アリが這っていて、なにげなくつぶしたら、「38億年の責任をもてますか」ということになり、そう簡単にはつぶせません。そう言うと、このごろ「蚊が媒介する」

デング熱が東京で話題になっていますが、「蚊の38億年の歴史はどうするの？」と聞かれると困ります。私は、もちろん叩きます（笑）。ただし、「あなたも38億年よね」と言いながら叩くことにしています（笑）。同じようだけれど、ちょっと違いますでしょう？ そこが難しいところです。いのち以外のものは、例えばダイヤモンドがあつて、「これ大切ですね」と言ったら、永遠に失くさないようにすればいいわけです。しかし、「いのちは大切ですね」と言っても、生きものは必ず死にますし、動物は他の生きもののいのちをいただかないと生きていけません。植物は、自分たちだけで生きられる能力を持っていますが、私たちは、他の生きもののいのちを頂戴しなければ生きていけない。そういうふうにできているわけで、そこがづらいところです。「生きものを殺すのはいやだ。豚や鶏は食べない」と言つて、「私はベジタリアンで、ほうれん草しか食べません」と言つても、ほうれん草だって生きものですから。ほうれん草だって、38億年です。何も生きものを殺さないで生きていけたら、とても楽でしょうが、それでは生

きていけない。生きるということは、それも含めて考えなければいけない。機械に比べて複雑であり、生きものを基本に考えるとしたら、その難しさを考える決心をしなければなりません。

もうひとつ申し上げたいことは、人間がここに描いてあるということです。人間も他の生きものたちと同じように、親がいて、親がいて、ここに存在しているのです。さかのぼると、人間の始まりはアフリカです。私たち日本人も含めて、地球上にいるあらゆる人が、全員アフリカに戻ります。蝶は、アゲハチョウ、モンシロチョウと、たくさん種類がありますが、人間は1種類です。中国に暮らしている人も、アメリカに暮らしている人も、アフリカに暮らしている人も、私たちの祖先はひとつです。きょうだいです。だからこそケンカするのもかもしれませんが、民族差別をして、「あいつらは違う」というのは、おかしいのです。昔、子どもが悪口を言うときに「お前の母さん、出べそ！」と言っていました。お友だち同士なら、それもいいかもしれませんが、お兄ちゃんが弟に「お前の母さん、

出べそ！」と言ったら、おかしいですよ。自分のお母さんのことなんです。それと同じで、人間同士での差別は、自分に戻ってきます。しかも、人間だけでなく、私たちは他の生きものたちとも祖先を同じくしているわけです。

わざわざそれを申し上げるのは、いまの科学技術文明の中で、とくに都会で、機械に囲まれて便利な生活をしていると、どうしても「人間だけが扇の外にいる」ように思ってしまう。いろいろな生きものを可愛がってやらなければいけないと上から眺め、人間が支配しているように思ってしまう。その典型が「地球にやさしく」という言葉です。とてもいい言葉のようですが、私は疑問に思います。人間のほうが「地球にやさしく」していただかなければ生きていけないのです。「地球にやさしくしましょう」という言葉は、いい言葉のようだけれども、人間のほうが地球よりも上位にいるような錯覚が、そこにありはしないでしょうか。ですから、「地球文明」を考えるならば、地球のあらゆる生きものが一緒に暮らしていける文明をつくらなければ

ばならないと思います。

「地球のことを私たちは何も知らない」

具体的なことをお話します。私たちは何となく地球のことを知っているような気がしていますが、「実はよく知らない」という一例を挙げます。先ほど、170万種類の生きものに名前があると言いました。私たちが知っている生きものです。モンシロチョウ、アゲハチョウ、ギンヤンマ、カブトムシ、犬、猫と、名前をつけてきた生きものが170万種類です。

本当はどれくらいわかっているのか。アメリカの Smithsonian 博物館の人が、アマゾンの熱帯林へ入って調べました。アマゾンの密林で、70メートルぐらいの木の下から燻^{いぶ}します。30年ほど前の話で、ちょっと大ざっぱなことをやっています。地上へ樹の上の生きものを落とした。主に昆虫ですが、落ちてきたのを拾って並べ、世界中の生物学者に問い合わせました。「ここにいる虫の種類がわかったら、お教えください」。返事が返ってきました。

専門家は、どれくらい知っていたとお思いになりますか？ 何パーセントぐらい「知っている」と返事が返ってきたでしょうか。適当でいいので、勘で答えてください（笑）。

〔会場の参加者から「5%！」の声〕

5%、あまりにも専門家を信じていないではありませんか（笑）。実を言うと、3%です（笑）。私たちは何も知らない。97%は知りません。それなのに、熱帯雨林をどんどん壊しているのです。見たこともない生きものたちが消えてもいいのかしらと思います。

いまの社会は、何でも「知っている」人が勝ちです。知っているほうがいいことだ、素晴らしいことだという価値観であって、だから「知っているふり」をしてしまおう。「本当は、私たちは何も知らないと自覚しましょう」「事実そうなのです」と申し上げたくて、このお話をしました。知らないということは、ある面、いいことです。知らないからこそ、これからやるのがたくさんあるわけですから。よく「生命とは何か」「あなたは生命を研究しているのだから答えてください」

とおっしゃいますが、それに答えられるのなら、もう私が研究することはなくなります（笑）。わかっていないから、毎日、研究ができるわけです。これまでにわかったことを元に、わからないことを考えるのが素晴らしいと思います。

森をつくるものは誰か

熱帯林は、とても大事なところです。多様な生きものがいますし、酸素も出してくれる。地球文明を考える時、熱帯林は私たちを支えてくれるとても大事な場所として認識しなければいけません。マレーシアの熱帯林で、京都大学の人たちが観測場を作っています。私も30メートルぐらいのところに登りました。高所恐怖症で、高いところは好きではありませんが、緑の中ですと良い気分です。原始の状態になれるのです。うか。

熱帯林に、「鍵の木」（キー・プラント）——とても大事な木と言われている木があります。イチジクです。いつも、たくさんの実がなっているからです。森とい

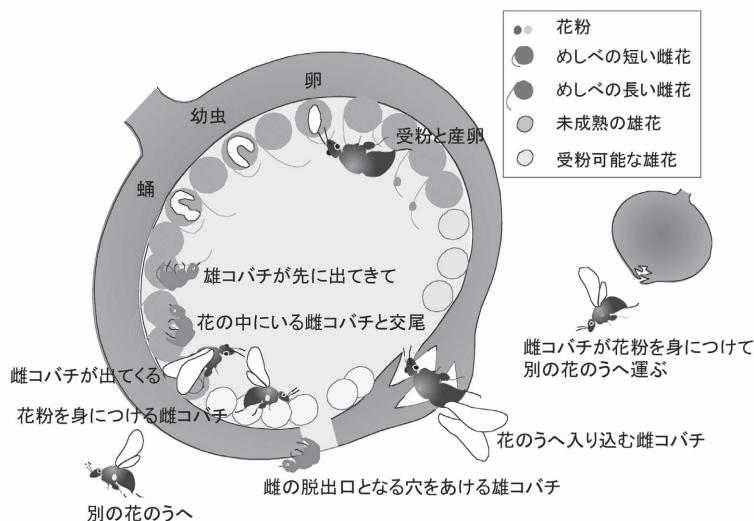


図2 雌コバチは、「めしべの短い雌花」に産卵する。「めしべの長い雌花」は、めしべに邪魔されて産卵管が届かない

う漢字は木、木、木と書きますが、木だけでは森は成り立ちません。虫や鳥、動物たちもないと森は成り立ちません。その食べ物が必要で、果物が一番よいのです。そこで、実をつけている木が大事なのです。私たちが食べるのは、品種改良されたイチジクですが、野生のものは直径が2、3センチの小さい実です。

この実の中に、小さなハチがいます。イチジクコバチといって、1.5ミリぐらいのハチです。イチジクの実は、じつは花です。花が外から見えないので、イチジクを漢字で「無花果」と書きますね。実〔花のうゝ花を入れる袋〕の中の房が花です。その実の中へ、イチジクコバチが入っていきます〔図2の右下「花のうへ入り込む雌コバチ」〕。卵を産みに行くのです。この中で、子どもが育ちます。雌コバチ、雌コバチの両方が産まれますが、雄には翅はねがありません。サナギから先に出てきて、花の中の雌コバチと交尾をします。そして——ここから先は男の人は耳をふさいでくださってもいいですが、この後、雄コバチは雌コバチが出て行くための孔を一生懸命開けて、そこで死んでしまいます。ここで生ま

れて、ここで死にます（笑）。私のせいではありませんが、生物学をやっているとオスはかわいいそうだと思うことが多いです（笑）。この孔から雌コバチが花粉を身につけて外へ飛び出し、また別のイチジクの実の中に入ります。これを1カ月から2カ月の周期で繰り返しているの、イチジクはいつも実がなっているわけです。

イチジクは、閉じている花のうの内側に花があるので、蝶や鳥などによる受粉はできませんから、イチジクコバチの力を借りています。一方、コバチは花のうに産卵して、幼虫がそこで育ちます。互いに利益があるわけです。面白いのは、両方の間に「一種対一種」の対応があることです。ある特定のコバチは特定のイチジクの中に入るのであって、助け合う相手が決まっている。一種対一種で、きちんと対応しています。

イチジクの仲間（イチジク属植物）には、どんなものがあるでしょうか。熱帯雨林では種類が多過ぎるので、日本の例でお話すると、アコウ、ガジュマル、イヌビワなどがイチジクの仲間です。それらの系統関係をDNAで調べます。アコウとガジュマルはとても近い

仲間だとか、このイヌビワとは少し遠いなどと調べていて、イチジクの仲間の系統図を作ります。そうすると、いまは様々に分かれているけれど、3千万年ぐらい前に戻ると、1種類だったということがわかってきました。さらに、イチジクの仲間の中に入っているコバチのDNAを調べます。ガジュマルの中のハチ、アコウの中のハチなどを捕ってきて、ハチの系統図を書きます。そうすると、イチジクの種類ひとつひとつに、それぞれ対応するハチがいますが、イチジクが兄弟ならコバチも兄弟、そういう関係があることがわかったのです。

3千万年前から、彼らはそうやって、ともに生きてきた。このような暮らし方を「共生」ということはご存じだと思います。共に生きる。でも、これは単なる共生ではなくて、もう何千万年も前から一緒に進化してきた。「共進化」です。こうしてイチジクとハチが共進化してきたので、イチジクの実がいつもなっている。イチジクを熱帯林を支える「鍵の木」にしているのは、この1.5ミリのハチなのです。

いま、私たちは木を伐るとちょっと心苦しいので植樹をします。そして、「うちの会社は10万本植えました」などと言います。もちろん、それは大変ですし立派です。しかし、何百億本とある森を、このハチがつくっている。ハチは、「森をつくってやろう」と思っているわけではなく、子どもを育てたいのです。子どもを育てるのにイチジクが都合がいいから入っているだけですが、結果として、このハチがあつ森をつくっていると言ってもいいと思います。すごいと思います。「虫けら」などと言わないでいただきたいですね(笑)。これはひとつの例ですけれども、こうやって見ていくと、この地球は誰がつくってくれているかということがわかってきます。

「人間だけが偉い」のではない

もうひとつ私たちの研究のお話をします。今度は蝶です。ナミアゲハは、ミカンの仲間の葉っぱにしか卵を産みません。カラタチや山椒なども含め、柑橘類にしか産みません。それは、子どもがその葉っぱしか食

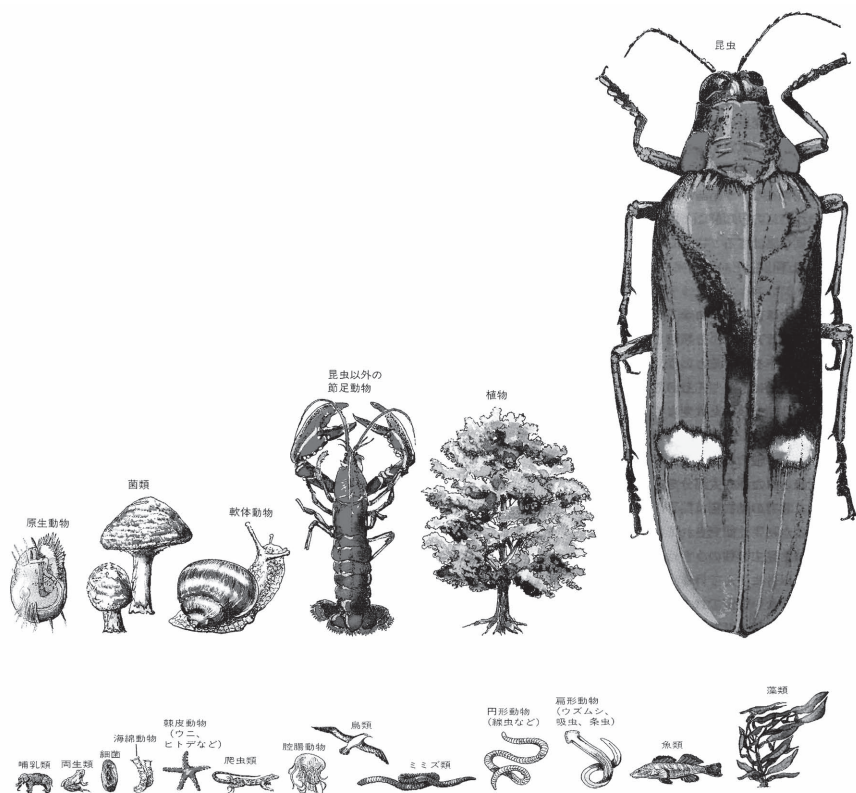


図3 地球上の生物の種数 生きものを分類群ごとの種の数にしたがって並べた図。多いものから順に、昆虫・植物・昆虫以外の節足動物・軟体動物・菌類・原生動物（ここまで上段）、藻類・魚類・扁形動物（ウズムシ、吸虫、条虫）・円形動物（線虫など）・ミミズ類・鳥類・腔腸動物・爬虫類・棘皮動物（ウニ、ヒトデなど）・海綿動物・細菌・両生類・哺乳類（図は「日経サイエンス」1992年12月号から転載）

べないからです。蚕だったら桑の葉しか食べないなど、蝶の仲間、とても偏食です。人間の子どもでしたら怒られてしまいますが、蝶は子どもたちのためにミカンの葉を選ぶのです。どうしてミカンの葉がわかるのでしょうか？ 触角などが考えられましたが、実は脚でした。前脚で、葉っぱをトントンと叩きます。ドラミングと言いますが、叩くと、葉っぱに傷がついて中から成分が出てくる。前足に黄色い毛（感覚毛）が生えていて、これが味見をするための毛です。ここに味覚細胞があつて、毛から葉の成分が入っていくと、この細胞が脳につながって、「あつ、ミカンの葉の味だ」となる。すると安心して卵を産むわけです。蝶のお母さんは本当にしつかり者です。

私たちはもちろん脚ではなく舌で味を見ます。舌には「味蕾」という細胞があることを聞いていらつしやると思います。皆さんの舌にある味蕾細胞は、蝶の脚にある味覚細胞と同じ構造です。祖先は同じでつながっていると申しましたけれど、まったく同じものを使っているのです。だから、人間だけ偉そうにしないほ

うがいいですね（笑）。

こんなふうには、虫のことを一生懸命調べていると、虫ってすごいなと思えて、こんなに大きく虫を描いてしまふ——そういういいかげんな話ではありません（笑）。これ（図3）は種の数を表している図です。80%ほどは昆虫なのです。それから植物です。象が一番小さく描いてあります。象は哺乳類、人間も哺乳類ですからここに入ります。

「地球文明」と言うならば、人間が偉そうにするのではなく、イチジクとハチの例のように、多様な生きものが豊かな地球をつくってくれているのだということを忘れないでいたい。その上で、人間は人間らしく生きていくことです。コンピュータも造り、自動車も造って。ただし、最初に原子力発電所の事故に触れましたが、人間は自然まで機械のように思い、すべてを征服し、何でもできると思つてしまった。人間の体も、機械のように「壊れたら部品を取り換えよう」という考え方で見ているように思います。でも、人間は機械ではありません。38億年という時間があつて、ここに

こうしているわけです。機械は便利ですが、機械、機械と言わず、また「人間がすべてだ」と思わないでやっていきましょうというのが、「生命を基本にする社会」です。

「生きる力」が育った！ 小学校で農業科

ここまで、「他の生きものたちはすごい」と言い過ぎましたので、「人間もすごい」ということを言わなければなりません。生きものたちは皆すごい。イチジクとコバチの例を挙げましたが、どの生きものもそれぞれ素晴らしい。チータは速く走るのが得意だし、イルカは泳ぐのが上手だし、皆、それぞれの能力を活かして見事に地球をつくっていますが、人間にしかできないこともあります。

それは、言葉が話せるということですし、一番大事なのは「想像力」です。これは、他の生きものにはありません。私たちに最も近いチンパンジーにもない。私たち人間だけです。想像力は、いま見えないものを見て考える力です。昔はどうだったろう、未来にやっ

て来る子どもたちがちゃんと生きられるようにするにはどうしたらいいだろう。いま、アフリカでとても困っている子どもたちがいるので、その子たちのことを考えなければいけない……。想像する力、見えないことを考える力で、困っている人がいること、これから生まれてくる子どもたちのことなどを考える。それは人間にしかできません。

それから「分かち合う心」。『ちようだい』と言われなくても、自分から皆と分かち合おうとする心。本来、これは人間の特徴としてあります。それから「世代を超えた助け合い」。おじいちゃんが孫を可愛がるとか、孫がおばあさんを助けるとか。野生の生物は大体、生殖を終えたら死んでしまいますから、野生のクマに曾祖父がいるということはありません。ですから、世代を超えるのは人間だけができることです。これをやらなければ人間らしくない、ということが生物の世界を見ればわかってきます。

でも、それをお説教してもしかたがありません。実際に、そういう気持ちを育てるのにはどうしたらいい

のかを考えなければなりません。これについて、私の体験をひとつお話しします。福島県・会津の喜多方市の小学校で「農業科」をつくってくれました。

〔日本経済新聞2006年5月29日付「生き物」の時間
取り戻そう―農業こそ総合学習―というインタビュー記事で
の中村氏の提案を受け、喜多方市では2007年度から全国
初の教科「農業科」を3校でスタートさせた。2011年度
からは、同市のすべての小学校で実施されるまでになってい
る（年間35時間程度の授業）〕

いま、日本の社会は、子どもたちの教育で一番大事なのは「英語」と「コンピュータ」だと言っています。それらが大事でないとは思いますが、コンピュータを教えて、何を扱えるようにするのかと問いましたら、「例えば、株の操作を教える」という。それができていないから日本はダメなのだと行って、まるで、お金も上げが人間の最大の目的であるかのような話をします。そこで私は「コンピュータで株を学ぶよりも、畑でカブを育てたほうがいいのに」とつぶやいたのです。批判されるのを覚悟で言ったのですが、割合に好意的な

反響がありました。そのなかで、喜多方市の市長さんが「喜多方市の小学校でやりましょう」とおっしゃって、農業科をつくってくださいました。

農業科って大事です。単に、子どもたちが畑に行って働くとか、稲刈りをお手伝いするとか、夏休みに農村へ行くというのではなく、時間割の中に、国語、算数と同じように「農業」が入っていて、1年間しつかりやります。先生方は農業は必ずしも得意ではないので、世代を超えた近くのおじいさん・おばあさんが大張りきりで教えてくださいます。喜多方には17校ありますが、百人くらいのおじいさん・おばあさんが教えておられて、子どもたちは、自分たちのできないことがどんなでできる姿を見て、とても尊敬します。私は、この話になると2時間でも3時間でも話してしまうので、やめますが、本当に素晴らしいのです。

3年生が書いた作文です。「ぼくは、えだ豆を作りました。……シャワーのような水やりがとても楽しかったです。えだ豆に『大きくなれよ』と話しかけました。……農業は、さい高です」（平成23年度喜多方市小学校農

業科作文コンクール作品集』から。以下同じ)。はじめ、この子は「何で農業なんかやるんだ」と嫌がっていたフシがあるのですが、「農業は最高です」と言うようになりました。ここで大事なものは、『大きくなれよ。』と話しかけました」という言葉です。枝豆は、スーパード買ってくるときは「食品」です。ビールのおつまみとして食べる。この子も食べますけれど、この子にとって、ここでの枝豆は「生きもの」です。だからこそ、ふだんは言葉をかけたりしないけれど、「大きくなれよ」と思わず話しかけてしまう。

それから、4年生の子はこんなことを書いています。「学校でとれた野菜を家に持ち帰った時も、家族がすごいねと笑顔で返してくれました。……一生存命育てれば育てるほど、おいしい野菜になり、みんなの笑顔が増えるなんて、野菜作りには、とてもすごいパワーがあるのだと思いました」。そうですね、家族と一緒にやる。そんな力がある。

5年生です。「原発事故のせいで……せっかく農家の人が苦勞して野菜や米を作ったのに出荷停止になった

りしたニュースも何回も見ました。……喜多方のお米は安全ですごくおいしいです。……福島県へ来る人が増えるといいなとこの米作りで思いました」

これは大事なことで、「新聞を読みなさい」「ニュースを学びなさい」と言ってもなかなか大変ですけれども、この子は自分のこととして、自分で考えています。

6年生です。「私たちが育てたあずきを使って赤飯をつくりました。……そして、一人暮らしのおばあさんやおじいさんにくばりました。……泣いてよろこんでくれた人もいて……その時の事がとても心に残りました」。高齢化社会をどうするとか、地域社会をどうするとお説教をしてもダメで、こうした「つながり」の中から、子どもたちは自分で考えるようになっていきます。

この子たちとおつき合いをしているうちに、「生きる力」が伸びているのを実感します。私が言っている「生命を基本にする社会」は、生きる力を持った社会です。人間は生きものですから、コンピュータが扱えるということを超えて、もっと奥にある「生きる力」を豊かに持つ人間を育てなければいけないのではないか。そ

う思って、私は「農業科」を提案したわけです。その結果、子どもたちを見ていて「ああ、これは生きる力だ」と思う場面があります。それは、子どもたちの素敵な笑顔であり、また自分で考えて行動する力、交渉能力、「こういうことをやりたいんだけど、おじいさん、こうやってくれませんか」とかですね。それから、表現能力、コミュニケーション能力、これが抜群に身につきました。企業を経営していらいっしやる方がご覧になって、「あつ、こういう子がいたら、すぐ採用します」とおっしゃっていました。が、「まだ小学生ですから」と言いました（笑）。確かにそうです。「自分たちの仲間がこうだったら、とても素晴らしい」、そう思われることでしょう。私は自信をもって言います。「農業をやると、生きる力が身につきます」と。それが、私の実感です。別に、全員が農家になりましようというのではなくて、ちゃんと自然に向き合う。都会で暮らしていれば、虫を見たり、お花を育てたり、そういうことでもいいですが、とにかくコンピュータができればいいというのは、人間は育たないでしょう。ですから、日本中の子ども

が農業科をやればいいと思います。その気になれば、都会でも、子どもたちがやるぐらいの土地が近くに確保できるはずだと思いますし、「本当は日本中でできるんだけど」と思っています。文科省でも口では「いいですね」とおっしゃいますが、なかなか腰が重いです。

「生命誌」の観点から宮沢賢治を読む

いま文明は、社会は変わらなければならない時にあると思います。転換期です。科学技術文明で都会のほうが進んでいる、大きいビルディングを建てて、何かキラキラしているのがよいと錯覚している時代は終えて、自然と向き合い、「生きていく」とことと向き合う文明に変えなければいけません。技術を否定しているわけではありません。毎週、東京と大阪を往復しており、もし新幹線がなかったらどうしようと思いますし、生活を支える技術を否定しません。けれども、基本的な生き方として「自分は生きものだ」ということをベースにして価値判断をする人になってほしいのです。

「そろそろ変わったほうがいいのではないですか」と

申し上げても、多くの方が「変わるのには難しいでしょう」とおっしゃいます。しかし、歴史を見れば、文明は変わってきているわけです。山田慶児先生の『技術からみた人類の歴史』〔編集グループSURE〕でも紹介されていますが、まず、紀元前3500年から同3000年の「技術革命の時代」です。この時代に、人類は鉄を作り、文字を考え、車輪や織物を作りました。それまでできなかったことができるようになった。大変な変化です。2番目に大きな変化が起きたのが、紀元前600年から紀元ゼロ年くらいまでの「人類の教師たちの時代」です。この時代に、お釈迦様やソクラテス、孔子やキリストも出ていて、いま私たちが精神的に大事だと考えることは、不思議にこの時代に誕生しています。地球のいろいろなところで、人類の教師と呼ばれる人たちが出現したのです。「精神的に、ものを考えよう」と皆が思う時代があったのです。それがずっと続いて来て、14世紀以降、ルネサンスから始まる近代文明の時代になった。先ほど申しました「世界は機械である」という考えが広がって、科学技術文明

を進めようという時代が始まり、いまも続いているわけです。これを、このままずっと続けていくことだけが、私たちの生き方ではないでしょう。これまでも、こんなに変化してきたのですから。

そこで、どんな時代を考えるかです。私は、いままでお話ししてきたように、自然に向き合い、「生きもの」であることをきちんと考えていきたいと思っていますが、「機械文明いいじゃないか、便利じゃないか」とおっしゃる方のほうがいまは多いのかもしれませんが、でも、私は歴史を考えて、いまだけを見るのではなくて、「次の文明は……」ということを考えたいと思っています。

このことを私は考え続けてきたわけですが、その中で特にショックを受けたのが、東日本大震災でした。そのときに何だか気になったのが宮沢賢治でした。実は、それまではそんなに宮沢賢治は好きな人ではなくて、いまでも好きとは言えないし、何となく、ちょっとつき合いにくそうですよ（笑）。ただ、東北の農家の人たちの話を聞いているうちに、やっぱり宮沢賢治は

先を行っているのではないか、私が学ばなければならぬことを言っているのではないかと思うようになって、読みました。

賢治の童話「セロ弾きのゴーシュ」をご存じだと思いますが、生命誌研究館が今年20周年でしたので、「生命誌版 セロ弾きのゴーシュ」を創り、皆さんに観ていただきました。人形劇師・沢則行氏に協力していただき、人形と人間の両方でつくった舞台です。楽団でセロ〔チェロ〕を弾いているゴーシュは、あまり上手ではなくて、楽長にダメだ、ダメだと叱られてばかりいます。ゴーシュが家に帰って、夜ごと、猫、カッコウ、タヌキ、野ネズミたちと、いろいろな話をし、彼らの頼みで演奏しているうちに、だんだん「生命の音^{いのち}」をもらって上手になっていきます。

この童話を知ってはいましたが、震災が終わった後に読み直したら、あることに気がつきました。ゴーシュは、水車小屋の家に帰ると、必ず水を飲みます。楽団で怒られて、しょんぼりしながら家へ帰ると、まず水を飲むのです。そこで、「ゴーシュは乾いた文明社会

に適合できず、そこではうまく弾けなかったということかもしれない。それで、家に帰って水を一杯飲んで、湿り気のある自然の社会へ帰って行く。そういうことではないか」と考えたのです。そうして、水車小屋で生きものたちとつき合っているうちに、「生命の音」をもらう。そして最後にゴーシュは見事に弾いて、アンコールを求められるまでになるわけです。ゴーシュが苦勞して帰ってきて、水を飲んで、自然の世界で小さな生きものたちから学んだその音が、最後には、乾いた文明社会を動かしたのです。観客が拍手喝采、皆の心を動かしたわけです。まさに生命誌の世界です。「そういうことを宮沢賢治は言っているのだ」と思い、それを人形劇にして公演しました。

賢治は生命誌という観点から読めます。賢治が生前に出版した本は2冊しかなくて、ひとつは『春と修羅』という詩集。もうひとつは、『注文の多い料理店』という童話集です。あとは全部、亡くなった後の出版です。なかなか認めてもらえなかったのでしょうか。その『注文の多い料理店』に「序」がありますが、そこに賢治

が言いたかったことが書いてあります。

「わたしたちは、氷砂糖をほしくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗らしゃや、宝石いりのきものにかわっているのをたびたび見ました。わたくしは、そういうきれいなたべものやきものをすきです。」〔新潮文庫版、以下同じ〕。

生きている自然のすごさ、豊かさ、ありがたさということでしょうか。

「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。（中略）ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。」

自然はそういうものなのです。割り切れません。

「けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。」

賢治がよく使う言葉が「ほんとうの」です。読んでいると、「ほんとうの幸せ」「ほんとうの豊かさ」「ほんとうの賢さ」のような表現に出会います。

例えば、「けんじょう虔十公園林」という賢治の童話があります。虔十という発達障害の子がいて、その子が家のうしろの野原に700本の杉の木を植えます。反対されたり、からかわれても、苗を植え続け、世話をして、小学校の子どもたちがそこで遊ぶのを、虔十はとても喜ぶのです。やがて虔十が病気で死んでしまった後も、杉林は大きな林になっていきます。村はどんどん開発されて町になり、汽車が走り、工場ができ、田や畑もなくなっていくきます。そんなふうに変わってしまったのだけれども、その杉林だけは残って、相変わらず、そこで子どもたちが遊んでいました。ある日、その村

の出身でアメリカに行って博士になった人が、村に帰ってきて、すっかり面影のなくなった村の中に、昔自分が遊んだ杉林が残っていることに感動するのです。「ああ全くたれがかしこくたれが賢くないかはわかりません」。そして、杉林は「虔十公園林」と名づけられて、公園として保存されることになったのです。童話の最後のほうには、こう書かれています。「全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかな匂、夏のすずしい陰、月光色の芝生がこれから何千人の人たちに本当のさいわいが何だかを教えるか数えられませんでした」みんなからバカにされていた虔十だったけれども、彼だけが「ほんとうの幸せ」とは何かを知っていたのかもしれない。「ほんとうの賢さ」をもっていたのかもしれない。賢治は、本当の賢さ、本当の幸せ、本当の豊かさというものを考えて、考えて、それらは「自然からもらえる」と言っているのだと思います。

「いのちを愛づる」文明へ

私は、この社会を人間の「生きる力」でつくつてい

きたいと思っています。もちろん、経済は大事です。経済は要らないなどとは申しません。技術も要らないとは申しません。でも、「経済が一番大事で、そのためにどんどん新しい技術を開発して、お金もうけをしない」。そう言われると、いのちは苦しくなります。こういう方向に働いている力が、権力だと思います。「権力」と「生きる力」は正反対の方向を向いているのです。人間は生きものです。ですから「生きている」ということが一番大事であって、それを助けるためにこそ、技術を開発していく。素晴らしい技術を開発して、経済を豊かにしていく。そういうふうに、すべてを「よりよく生きる」ことを出発点に考える社会、これが「生命を基本にする社会」と私が申し上げている社会です。「そんなこと言っても夢みたいだ」とおっしゃれば、そうかもしれませんが、私はそういう社会をつくる努力を、小さい力ですが、やっていきたいと思っています。

私が一番大事にしている言葉が「愛づる」です。生命誌研究館が基本にしているのは「愛づる」という言葉なのです。「蟲愛づる姫君」というお姫様が、紫式部

と同じころ、千年前に京都にいらつしやいました。「短編集『堤中納言物語』の一篇『蟲愛づる姫君』の主人公。生命誌研究館では、姫君の物語の世界を六曲の屏風に描いて展示。また、研究館10周年の際には、この物語をベースにした朗読ミュージカル『生命誌のおしゃべり』ものみな一つの細胞から』を上演。これは後に、中村桂子・山崎陽子作、堀文子画『いのち愛づる姫 ものみな一つの細胞から』（藤原書店）として出版もされた」

このお姫様はちよつと変わつていて、男の子たちに虫を集めさせ、「可愛いわね、きれい、素晴らしい」と言います。両親は困つたものだと思ひ、侍女たちは気味が悪いと騒いで、やめさせようとします。ところが、このお姫様は少しも動じません。毛虫を手に乗せて、「なんてかわいらしいのでしょう！ だれでも花やチョウばかりを愛でるけれど、それはおろかなこと。うわべだけではなにもわかりませぬ。もとから調べて、それがどのように変わつていくのかを見きわめてこそ楽しいものを」と言います。うわべではなくて、本質を見ましようというのです。「姫のこの言葉は、『いのち愛づ

る姫』から。「蟲愛づる姫君」で該当する原文は「この姫君のたまふこと、『人びとの、花や蝶々と愛づること、はかなくあやしけれ。人は、まことあり、本地尋ねたるこそ、心ばへをかしけれ』とて、よろづの虫の、恐ろしげなるを取り集めて、『これが成らむさまを見む』とて、さまざまなる籠箱こばこどもに入れたたまふ」

この姫君も、宮沢賢治と同じように「本当の」ことを求めているのです。毛虫をかわいがるなんて評判が悪いと言われても「見かけが汚いとか、そういう問題じゃないでしょう。本当の生きる力は、この虫のほうにあるでしょう。これが蝶になるのですよ。なにごとにもよく探求して、その行く末を観察していけば、ちゃんと大事なことがわかつてくるのよ」と言つて、さなぎが羽化しそうなのを皆に見せたりするのです。「よろづのこと、もとをたづねて、末を見ればこそ、事はゆゑあれ……鳥毛虫かほじの、蝶とはなるなり」

幼虫からサナギへ、さらに成虫へという変化を見ているのですから、発生生物学です。見かけにとらわれず、本質を知ろうというのは科学の精神です。この姫

君には、それがあった。生きものを機械のように分析するのではなく、生きものの中にある歴史を読み取り、「生きている」過程を全体としてとらえていく。まさに「生命誌」の心です。

生きものとのそういう交流を通して、いのちを愛しく思う、「愛づる」心、それを姫君はもっています。この「愛づる」は単なるloveとは違います。「ああ、きれいなね、可愛いわね」とは違います。見かけがどうではなく、本当に「生きている」姿を見たときに湧いてくる愛、時間をかけて本質を見いだしたときに生まれる愛、それがこの「蟲愛づる姫君」の心です。

この「蟲愛づる姫君」のことを宮崎駿さんが現代に活かしたのが「風の谷のナウシカ」の少女「ナウシカ」です。宮崎さんも、何となくこの少女が気になっていたのでしょうか。私もとても惹かれます。紫式部と同じ平安時代、千年も前に、「生きもの」をきちんと見つめて、その本質を考えようと言っているお話は世界中どこを探してもありません。日本は素晴らしい文化をもっている、声を大にして言いたいと思います。

もちろん、このお姫様はDNAのことはご存じない。けれども、私がいま考えていることとほとんど同じことがわかっていらっしゃる。お釈迦様もいまの生命科学はご存じないけれども、ほとんどこれと同じことをおっしゃっています。わかるということは、知識があるということとは別のことなのです。

こういうお姫様が千年前からいらしたこの国で、「生きていく」ことを基本にする社会ができないわけはない。私はそう信じています。それどころか、これを全世界に向かって発信することが、これからの日本の役目ではないでしょうか。これが、きょう与えられたテーマ「地球文明」への私なりのお答えです。

(なかむら けいこ／JT生命誌研究館館長)